

患者さんから学んだ看護

高校二年生の初めての病院実習で、私は言葉を上手く発せないA氏を受け持つことになった。A氏はパーキンソン病を患っており、表情が乏しかった。そのうえ、言葉を発しないためA氏の考えていることが全く読み取れなかった。私はA氏と何度もコミュニケーションを取り、情報収集をしようとしたが、A氏が私に何を伝えたいのか分からず、途中からA氏と会話をするのを諦めてしまった。

ある日、私はいつも通りA氏のバイタルサイン測定を行うために病室に行った。そこには私の指導教員がいて、A氏との会話を楽しんでいた。私はその光景を見てびっくりした。会話といっても教員がほとんど喋っており、A氏は教員の顔をずっと見ているだけだった。私は驚きながらもその様子を観察した。教員はA氏に向かって、ゆっくりと落ち着いた声で話しかけていた。教員は日常の些細な話題を選んでいった。何より印象的だったのは、教員がA氏の反応を見逃さず、「今ちょっと口元が動きましたね。嬉しかったですか？」と反応していたことだ。A氏はほとんど言葉を発しないが、教員との間には確かに“会話”が成立していた。私は、A氏が誰かと心を通わせているのを初めて見たような気がする。実習のあと、私は思い切って教員に尋ねた。「どうしてそんな風にAさんとコミュニケーションが取れるのですか？」すると教員は「最初から上手くいったわけじゃないよ。でも、Aさんはちゃんと反応してくれている。表情が乏しくても、目の動きや呼吸のリズム、少しの瞬きに意味があるの。言葉だけがコミュニケーションじゃないよ。」と言った。その言葉が私の心に深く刺さった。私はそれまで、話せない＝意思の疎通が出来ないと決めつけていた。私が気づけなかっただけで、A氏は私に何かを伝えようとしてくれていたのかもしれない。私は翌日から気持ちを切り替えてA氏と向き合い直した。バイタルサイン測定するときも、数字を追うだけでなく、「冷たくないですか？」「痛くないですか？」と問いかけを挟んだ。返事がなくても、A氏の見線の動きや僅かに変わる呼吸を観察した。すると少しずつだけれど、A氏が瞬きで答えてくれたり、視線で私の顔を追ってくれたりするようになった。ある日、話していてA氏がほんの少しだけ口角を上げた。その瞬間、言葉じゃなくても人と人は通じ合えるということを初めて実感した。実習最終日、私はA氏に「短い間でしたが、ありがとうございました。」と伝えた。A氏は静かに私の方を見て、瞬きを一度だけゆっくりとした。私はその瞬間に、感謝の気持ちや別れの寂しさが込められているように感じて、涙が滲んだ。

この経験を通して、私は「伝えること」「聞くこと」の意味を考え直した。看護において大切なのは、相手の言葉を待つことではなく、心に寄り添う姿勢を持ち続けることだと学んだ。患者さん一人ひとりと丁寧に向き合い、その人らしさを尊重する看護師に私はなりたい。